

啄木の短歌創造過程の心理学的研究 (七)

—— 歌稿「暇ナ時」の逐次的分析 ——

大 沢 博
(岩手大学教育学部)

はじめに

本論文は、同じ題の論文(一)～(六)（岩手大学教育学部研究年報第三八卷、第三九卷、第四〇巻第一号、第四一巻第一号、第四二巻第一号、第四三巻第一号）にひきつづいて、石川啄木の歌稿ノート「暇ナ時」の短歌を、逐次的に分析していこうとするものである。研究方法は、(一)で述べたので省略する。

七月二十三日の六首

明治四十一年七月二十三日、啄木は日記に次のように、悲哀感、郷愁、死の願望、苦痛をほげしい調子で記している。

「十一時に目をさまして、枕の上で浜民の秀子さんからの手紙を読んだ。温かい涙が不意に両頬をぬらした。心ゆく許り泣いた。……………秀子さんは今月の末に浜民を去って郷里に帰り、九月からは九戸郡にゆくといふ。私の浜民、浜民の私といふもアト十日間だけの事で」と書いてあった。

(略) 故郷と此人と自分と、この三つは、或意味に於て一つの繩に繋がってゐた。それを今此人が浜民を去ると聞いては、三つが三つ、離れ離れにされる様な気がする。少くとも今日以後、自分が故郷を忍ぶ心には、それはそれは云ひ難い淋しさ悲しさが伴ふであらうと思はれる。又此人を思出すにしても、何だか自分の心の領分以外に脱した人の様な気がするに違ひない。……………何といふ事もなく、自分は故郷の事さへも今後は心ゆく許りなつかしく思ふ事が出来ぬ様になつた様な気がして、半時間許りも泣いた。

一日故山の事許り考へた。単純な生活が恋しい。何もかもいらぬ。唯故郷の山が恋しい。死にたい。

自分の歌と芳子の歌を清書して与謝野氏に送つた。中に
大声に故里人をのしりて背に石うたれのがれ出でにき
かなしい日であつた。秀子さんへ返事を出した。

十時頃から一時頃まで金田一君と語つた。樺太の話はうれしかった。鳥も通はぬ荒磯の、太い太い流木に腰かけて、波頭をかすめてとぶ鶴の群を見送つたり、単調な波の音をかぞへたりした光景！ アイヌ少女のさま！

自分は、真の真面目になれぬといふ苦痛を語つた。悲哀とか苦痛とか、自分からはそれを詩化し、弄ぶくせがあつて、悲哀の底苦痛の底にある

「真面目」といふものに面相接する事が出来ぬ。自分は毎日心暗く、何の張合なく、何もせず悲しんで許りあるし、身に迫る痛感の為に、死なうと許り考へてゐるが、然しながら、それでもまだ真に真面目に触れてゐない様な気がして仕方がない。

人生に倦んだだけなら（正宗の如く）まだよい。自分はすべて、一切、ありとあらゆるものが、苦痛だ、自分自身が苦痛だ。

ホヤが壊れた。三時までも眠れなかった!!!

三時までも眠れなかったのであるが、作った歌は六首だけであつた。

400 一塊の土に涙し泣く母の肖顔つくりぬかなしくもあるか

堀田秀子からの手紙で強い郷愁におそわれた啄木は、やはり少女サダの墓での悲哀体験を想起したのであろう。「一塊の土」は、その墓の土の一塊と解される。その一塊の土に涙を流し、しめつたその土をいじって、自分の肖顔をつくったことがあつたのであろう。

「わが肖顔」を「母の肖顔」になおしたのは、前者がかなり明瞭に墓にかかわる体験を示唆していたので、それを隠蔽しようとしたためと思われる。

401 死になむと思ふ夕に故郷の山の緑ぞ暗にはの見ゆ

死のうと思つている今夜、暗やみの中でも故郷の山の緑がほのかに見えていゝというのであり、死の願望と強い郷愁の歌である。

402 故郷の林に照れる月かげは神代の水のごとく澄むらむ

「故郷の山」から、今度は「故郷の林」であり、「暗」に對して「月かげ」である。浜民の山林の上にこうこうと照つた月を、なつ

かしく回想したのであろう。

403 大声に故郷人をのしりて背に石うたれのがれ出でにき

連続三首目の「故郷」の歌であるが、「故郷人」とは誰であろうか。翌日と翌々日にかけて作った七篇の詩の一つ、「一塊の土」にも、次のように「故郷人」が使われた。

『ただ一日、神よ、願はく、

ただ一日、故郷人の

眠りをば覚まし給ふな。』

かくぞ我恒に祈れり、

今日こそはわれ死になむと

かなしくも泣きぬる日に。

この詩の「故郷人」は、まさに故郷の死者の怨霊と解される語である。そこで、この歌の「故郷人」も怨霊と解すると、怨霊をののしつたために、背を石でうたれるようにたたられたので、自分は故郷を逃げだしたのだ、ということになる。怨霊は少女サダの霊であり、「石」にはその墓石のイメージを秘めていたと思われる。

404 すでに三日つづけて何か怒りたる父我が枕蹴ると夢に来

枕を蹴るほどの、父の怒れる姿を夢にみたというのは、少年期の墓あばき行為に對する、父の怒りを受けた体験がよみがえつてきたためであらう。

405 翼なき人と生れし日に翼きられし人とひとしとするや

「翼なき人」、すなわち生来上昇する可能性のない人と、自分の

ように上昇する可能性があったのに、それをたちきられたものとは同じではない、という思いを詠んだものと思われる。

七月二十五日作詩七篇

七月二十四日、日記に「枕の上でかなしい思出に耽った。妻も恋しく、妹も恋しい。何よりも、若かった日の自分が恋しい。」と書いた。やはり回想と悲哀感にひたっている。これは朝のことであるが、夜のことについては、「兄と弟」といふのを書かうと思ったが、他日書くべき長篇を削る様で、遂々書きかねた。枕について、曉までに、「流木」「森の中」「山頂」「黒き箱」「白骨」「老人」「一塊の土」以上七篇の詩を、半分位づつ書いた。」と記している。これらの詩を完成したのは、翌日二十五日であった。日記には、「半醒半眠の間に、自分が五つ許りの頃、鉄道工事の技師か何かで村に来てゐた鈴木(?)とか云ふ人の娘であった——自分より二つ位年上の——名も知らぬ美しい子があつたが、その人が訪ねて来る様な気がした。／十二時ですと起されて、夕方までに詩を完成し、与謝野氏へ送った。」とある。幼児期の回想に年上の少女が登場している。

七篇の詩のうち、「一塊の土」は「啄木の作歌過程の心理学的分析」で、「山頂」は「啄木の作歌動機の心理学的分析」で、「老人」は「啄木の『我』の構造」で、「白骨」は本論文の(白)で、それぞれ引用し、他の作品との関連で論じてきた。いずれも墓や骨に関するものか、もしくは関連があると解されるものであつた。では残る三篇はどんな詩であつたか。それぞれの全文をあげて考察しておこう。

流木

わたつみ
渡津海の青の鼓は、とどろけり去年も今年も。

しらしらと明けゆく朝も
曇りたる夕も、つねに
変るなき響をあげて、
鞆轆と砕くる波の
波頭日も夜も白し。

白砂の長き落は
弓の如海を抱けり。
ちりしける枯藻の中に
足痕も印さず。はたや
沖をゆく帆もみる日なし。
時ありて嵐ぞ来り
渚辺の所々に
砂山を築きてぞ去る。

あはれその渚の上に
横はる大き流木
直径七尺ばかり、
砂山に根を打あげて、
枝もなき長き幹をば、
その半ば海に入れたり。
海鳥は時に来りて
此の上に翼やすめぬ。

あなあはれ、かかる景色は
あなあはれ、いづこの海の
あなあはれ、いかなる岸に
ありしとも我は知らざり。
知る人は教へたまへよ。
我行きてその流木の
かたはらに小犬の如く

寝ころびて普き波の
とどろきを直にききなむ。

身じろがで、荒磯の砂の
強き香をひたに吸ひなむ。

海鳥は来て我が足を

珍らしと啄み去らむ

さてやがて、愁ふ事なく

我深く深く眠らむ

あなあはれさむる期もなく。

(詩稿より)

最後に死の願望を暗示している詩である。

「流木」は、二十三日の日記に書かれた、金田一の話に出てきた語である。「十時頃から一時頃まで金田一君と語った。樺太の話はうれしかった。鳥も通はぬ荒磯の、太い太い流木に腰かけて、波頭をかすめてとぶ鶴の群を見送ったり、単調な波の音をかぞへたりした光景！アイヌ少女のさき！」と書かれている。この文につづくのが、「真の真面目になれぬといふ苦痛」についての所感である。

石田六郎は金田一氏に対し、啄木に語ったアイヌ少女の話とはどのような内容のものであったか、またその話を聞いて真面目になれぬと痛哭した啄木の真意は奈辺にあったか、この二点について質問し、回答を得た上で、次のように述べている。

「親友金田一氏の語る、死を終末とする詩情豊かなアイヌ少女サキの哀話は、まさに啄木の心底に眠る傷痕をゆさぶり、当時似純而非純なる遠隔恋愛に陶酔、弛緩した啄木の自我を覚醒せしめるに十分なる刺激を与えるものだったろう。『流木』以下七篇の長詩はこのように親友金田一氏によって啄木の錆びたる胸の扉が叩かれ押し開かれ、危うく麻痺せんとしていた啄木の自我が蘇生した、その蘇息たる啄木の真生命の再躍動から生まれ出た詩である。」

石田のこの見解に加えたことがある。それは、この死せる少女の名がサキで、サダと共通音を有しており、少女サダにかかわる思いが、ますます強く、啄木の心をゆさぶったであろうということである。

石田は、「流木」の内容については、次のように解釈している。

「これは、作者が、かつて海上に漂流し、いまは嵐によって渚に打ちあげられてしまった流木に、作者の憐情を寄せた詩である。海も材木も母の象徴となることは精神分析の通念であるが、そのような精神分析の象徴論にまつまでもなく、この流木は漂流中の流木ではなく、すでに渚に打ち上げられてしまった、流木としての生命を失ってしまった流木である。嵐によって『枝もなき』幹の根を砂山(墓)に打ちあげられた、動(生)から静(死)に転じてしまった流木である。そしてさらに、『あはれ、その渚の上に横たはる大きな流木』の『かたはらに』、作者が『われ来り』『小犬のごとく寝ころび』、限りなき哀惜の情を捧げ、『覚むる期もなく』『青き鼓のとどろきを直にぞ聞』き『荒磯の砂のつよき香を直にぞ吸える』、流木である。作者の小なる生命が、そのかたわらに寝ころび抱かれて覚むる期もなき生の安住を求め寄りんとする、大なる死せる流木である。つまり、この流木は作者がひたむきなエディプス情感をすり寄せんとする死せる流木で、この流木は、この作者の死せるエディプスの原始性愛対象の復活としての象徴だったのである。この流木は、作者にとつては、たれ知るよしもなき心の霊木であった。」

この「流木」を霊木とする石田の解釈に加えたことがある。それは、啄木が少女サダの卒塔婆という、具体的なイメージも思い浮かべていたであろう、ということである。啄木は後に、歌集『一握の砂』の第七首として「砂山の裾によこたはる流木に あたり見まはし物言ひてみる」をあげたが、この歌の「流木」は、まさに卒塔婆と解されるものである。

次に、別の詩にうつろう。

森の中

路はふと森に入れりき。
 両側の高き老樹は
 うち繁る枝さしかはし、
 いく哩、緑の屋根に
 密々と路を蔽へり。

湿らへる苔を踏みつつ、
 往来する人にも逢はず、
 黄泉路ゆく心地に行けば、
 わが咳ぞ森に響きて
 ひそ／＼と木魂おこれり。

ゆき／＼と路は曲りき。
 大なる白き獣
 我が前に路を塞ぎて
 うづくまり動くともせず。
 と見て我が足はとまりぬ、
 俄かにも胸ぞさわげる。

そは、あはれ、緑の屋根の
 隙洩れて、地を染めたる
 日の光。いとも眩ゆく
 目を射りてほのにゆるぎぬ。
 我はそを避けて通りつ、
 すでにして森を出でにき。

「森の中」というこの詩のテーマは、五月以来のうつ状態を秘め

たものと思われる。第二連では、「黄泉路ゆく心地」というように、死の世界のイメージとつながっていることを示唆している表現もある。

第三連の「大なる白き獣／我が前に路を塞ぎて」とは、色白の貞子の体を借りて現われた怨霊が、自分の創作活動を妨げた、という意味をかくしているように思われる。しかしそれは「地を染めたる／日の光」であった。怨霊は実体のないものだった、ということであろうが、それでもなお「避けて通」ったというのであり、十分に解放されていない心境を示唆しているものと解される。

残りの詩は、「黒き箱」である。

黒き箱

故さとの港を出でて
 七日経ぬ。水や空なる
 目路の涯、ただひろ／＼と
 一寸の煙だになし。
 矢の如く船は走れり。

ふなばた
 舷の白き舷漣

その中に浮きつ沈みつ
 漂へる黒き箱あり
 梯索の上なる水夫は
 呀と叫びて落ちて死ににき。
 やがてそは遠く離りぬ。

その中に何か入りたる。
 口紅く黒髪ながき
 生首か、読む人もなき
 文字かける尊き経か

はた空し虚か、知らず

あはれあはれ、大洋中に

漂ひて浮きつ沈みつ

破れざるかの黒き箱

怖ろしきかの黒き箱

その中に何か入りたる。

「^{よなばた}蔽」に近づいて「浮きつ沈みつ／漂へる黒き箱」は、無気味感もしくは怨霊の象徴であろう。「梯索の上」にいた「水夫」は、上昇せんとしていた作者の分身であろうが、「呀と叫び落ちて死」んでしまふ。水夫を死なせた、無気味な「黒き箱」の中には、何が入っているのか。「口紅く黒髪ながき」女の「生首」か、「読む人もなき／文字かける尊き経」か、あるいはうつろなのか判らないというのである。自らの心の深層がまだ不透明であるということであろう。

以上、三篇の詩をあげ、ごく簡単に考察してきたが、いずれも他の四篇と同じように、死の世界のイメージとの関連が推察されるものであった。

これら七篇の詩を完成した日の翌日、七月二十六日の日記は非常に短かく、その後半は、一夜、何か書くつもりだったが、些ともそんな張合がない。うつらうつらと、気のぬけた様な心地で、蚊に攻められながら、いろいろと事を考へた。大薩バに言ってみようなら、自己の価値、文学の価値、それらが総て疑問だ。深い深い疑問だ。人生は痛切な事実だ。予は生まれてから今が一番真面目な時だ。然し今でもまだ不真面目なところがある。」というものである。もはや倦怠感にとどまらず、自己や文学の価値にさえも、深い疑問を感じるようになってしまったのである。

七月二十七日から八月七日までの状況

二十七日の日記によれば、啄木は下宿料を強く催促された直後、ついに死ぬ決心をした。まず、日記の中のその部分を引用する。

「……………女中の愛ちゃんが来て、先月分からの下宿料の催促。いふべからざる暗怒をかくして、自分は随分冷やかに応答した。女中は五六回つづけて来た。とうとう、先月分の十五円若干を、明夕までに払はなければお断りするといふ事になった。

自分一個の死活問題が迫ったといふ感じが、妙に深く自分の胸にひびいた。と、一種の深い決心が起った。決心！——あらゆる不安を圧搾して石の如くした様な決心！

平生自分が、一家の処置、其将来などを思ふ時は、悲しいうち、痛ましいうち、苦しいうち、にも、猶多少空想を容れる余地がある。が、この自分一個の生命に関する問題になると、寸毫のゆるみもなく、隙もない。

決心！ に妙な怒りが伴ってゐた。然しこの怒りは、常の如く外に発しようとする怒りでなくて、却って内に破裂した——自分の一切の自負とかプライドとかを一碎して了って、……………噫、かなしい事だ！」

啄木は、自分で解決しなければならぬという考えで、炎天下、援助を求めべく友人のところを訪れようとする。しかし、藤条という友人は帰郷、小栗風葉宅は探してもみつからず、ようやく三回目、北原白秋の宿を訪れ、彼に会うことができた。しかし、下宿料に関する援助については、日記では言及されていない。北原の家を辞してからのことは、日記の文を引用しよう。

「神楽坂の中腹のトアル氷屋に入った。夕日の光で、坂を上る人も下る人も、長い長い影法師を逆風に坂に落して歩いてゐた。ガツカリした気持でそれを眺めてゐて、やがて遺瀨もない放浪の悲みを覚えた。そこを出て間もなく、トある店の時計を覗くと、恰度午後六時を示して

ゐた。

電車で春日町まで来て、広い坂をテクテク上ると、また汗が出た。電車が一台、勢ひよく坂を下って来た。ハット自分は其前に跳込みたくなつた。然し考へた。自分は自分の歌をかいた扇を持つてゐる。死ぬと、屹度これで自分だといふ事が知れるだらう。——かくて予は死ななかつた。そして、新聞記者をした事があるだけに、自分の驟死の記事の新聞に載つた体裁などを目に浮べた。」

啄木は、電車の前にとび込みたくなつたと書いたのであるが、金田一京助は、啄木自身が語つたこととして、次のように書いてゐる。

「ある日のこと、少しもう遅くなつてからだったが、石川君が私の室へ来て、こんなことを云つた。

『きよう、外へ出て、どこと云う当もなく、滅茶苦茶に歩いてる内に、伝通院の方から春日町へ下りるあの大きな坂のちょうど中途あたりでしたよ。尿！と思つて、後から来る電車の前を、一と思ひに線路へ跳び込んだんですよ。するとね、車掌が突拍子も無い大声を出しあがつて『馬鹿！』大喝一声すると同時に、ベルを滅茶苦茶に、チリリリリとやつたもんで、吃驚して、覚えす——ありや本能的ですね——跳び出したんですよ。殆んど袖をちぎるように車台が僕をかすつて飛んで行きましてよ。僕うっかりすると死んでいたところでしたねえ！』

始終、一緒にいて、石川君の苦しい心境を知り尽していた私も、それを聞いてギクリとした。私は、こりやいけない。どうにかしなければと考へた。』⁽⁶⁾

金田一の記述は、啄木の日記とほとんど一致するものであり、啄木に強い自殺観念が生じて、この二十七日には、決行寸前までいつたことは、まちがいないであらう。極めて危険な、まさに危機場面の日だつたといえよう。

二十八日になり、金の工面をするため外出したが、あてにした稿

料は、今月中は入らないことが判つた。その後、吉井勇宅に寄つてから下宿に戻つたが、事態は次のようになった。日記を引用する。

「矢張小栗氏の居候にならう、それで不かつたら死なう！これだけの考へしか出なかつた。燻んだ顔をして室に入って、岩崎君からの手紙を読んでいると金田一君、莞爾として入つて来て、『主婦が乱暴な事申上げたと云つて頻りにあやまつてました。』!!!

宿では金田一君から話してくれたので、今後予に対して決して催促せぬと云つたといふ。友の好意！そして十六円出してこれを宿に払ひなさいと！

予はあまりの事に聞いた口がふさがらなかつた。何と言つてよいやら急に言もない。』

焦眉の急はこのように金田一の援助で消えたが、同じ問題は依然として啄木の前にある。啄木は、日記の後半に次のように書いた。

「卒如として感じた。予は曩きに、人生は知るべからざるもの故、須らく之を味ふべしと考へた事がある。刹那刹那をも通さず、最も深く広く人生を味つた人が乃ち英雄といふべしであると考へた事がある。依つて又、人生の事、すべての価値、遂に理智によつて明かに知る事が出来ぬ。蒼茫たる天地の間の微々たる時間に活くる我等！所詮真に真面目に考へてくると、此苦き自覚より脱するには死の外にない。不如、盲動あるのみである。考へるな、盲動せよ。臆盲動するより外に此生を成すの路がない。……そして之がかの理想とか主義とかの虚偽に生くるより、一番安心だ!!

七時半に千駄ヶ谷のステーションに降りると夏草にすたく虫の声！晶子さんと楽しく語つた。新詩社解散の事、その後雑誌の事について、少し乱暴と思ふ程自分の思ふ通りの異見も言つた。女史は親身の姉の様な気がする。話が長くなつて、帰りには甲武線の電車がなく、四谷まで暗い路をテクテクと歩いて電車で帰つたのは十二時過ぎであつた。八月から大盲動する、と許り心で叫んでゐた。』

啄木が、窮地から脱するための行動方針として選んだのは、「盲動」あるいは「大盲動」であった。

七月二十九日、啄木は函館の宮崎宛に、苦痛が軽くなったこと、大盲動すること、新詩社解散問題などを書いた手紙を送っている。次のごとくである。

「……最近の十日間に至っては、すべて苦痛であった。僕生れてからこんな苦痛を感じた事がない。が、また、此頃位真面目だった事も今迄にない。真面目——赤裸々な真面目ほどの苦痛はまたとない。

今日だって不真面目ではないが、苦痛は軽くなっている。三日許り前に武雄君へ稍軽快な手紙をかいたが、アレは対手が軽快な男だから軽快な手紙をかいたので、僕自身は決して軽快でなかった。然し昨日の夕方からは僕自身も軽快になりかけて来た。これは確たる心的衝動があつた変化だから、当分変わるまいと思ふ。兎に角この手紙は何の苦痛なしに書いてるから安心してくれ玉へ。

此一ヶ月間に僕の経験した——ひそかに経験したメンタルテンベストは、今朝になつて考へると頗る興味のある、且つ意義のある事であつたと思へる。いづれこれは他日作物に描く機会がある事と思ふ。且つ面白い事でもないから今日は書くまい。然し僕は実際こんな暴風、——殆んど一点のゆるみも隙もない煩悶苦痛を感じたのは初めてだ。

マアこんな事はやめよう。兎に角僕は遂に死にかねた。猛烈に戦つて遂に生存慾に敗れた。僕を此怖ろしき思想から脱せしむと全力を尽してくれた金田一君に謝する。一昨日下午宿屋から追放令が下つて、僕は半日九十三度の炎天の下、知らぬ町をさまよつたりしたが、それも金田一君が中に立つて、兎も角追放令だけは解除された。

蒼茫たる宇宙の間に僅かの時間を与へられて生きてゐるのが我ら人間だ。価値も何もあつたものでない。人生に定義がないから、真とは何ぞ美とは何ぞ、皆不可解だ。芸術にも定義なく、従つて価値なく、自己にも定義なく価値がない。考へると死ぬ外はない。虚無だ。盲動あるのみ。これが僕の得た目下の結論だ。君。遂に盲動あるのみだ。真に真面目に

考へると、死ぬ外ない。遂に遂に盲動あるのみだ！

八月は大に書く。大盲動をやる。……」

このように、「盲動」という語を繰り返して使つて、この方針を強調している。また八月四日の宮崎宛絵葉書でも、末尾に「肌着一枚にサルマタで盲動してゐる」と書いている。この「盲動」の意味について、八月二十二日の岩崎正宛書簡で、「盲動主義——クダケテ言へばメクラ滅法主義でやつてゐるが……」と書いている。「メクラ滅法主義」だといふのである。

七月二十九日からは、日記の中に強い抑うつを示す記述はみられない。八月三日の日記には「一睡もせず」とあるが、「昨夜蚊に攻められて」とある。八月四日の日記には、「半日金田一君と語る。例の稚き頃の思出。」という注目すべき記述があるが、思い出の内容は書いていない。この日与謝野氏より為替五円送られて、それを金にかえ、蕪村句集、唐詩選、義太夫本、端唄本二冊などを買ひ求めた。五日にその義太夫本を読んだが、「傾城阿波鳴門巡礼歌の段、涙落ちて雨の如し。物の本をよみて泣けること数年振なり。」と感動し、また床についてから蕪村句集を読んで、「唯々驚くに堪へたり」と驚嘆している。

この五日、金田一と共に娘義太夫をききに行ったのであるが、歸りに寺門で辻占をもとめている。「金田一君と共に交々披いて笑ふ。子には六つあり。こは面白しと残る一つを披きしに、日の出だよ！」吉兆と呼びて笑ふ。」と書いている。吉兆ということ、笑いさえ生じたのである。

七日の日記には、「昌平橋にて与謝野氏に逢ひ、共に明治書院にゆき、十一時頃千駄ヶ谷に至る。夏草の路、蜥蜴を見て郷を思ふ。庭の萩風に折れたり。杉垣の下なる向日葵の花、白と鹿の子の百合の花、風情あり。」とある。自然に心を寄せる余裕がでてきたようである。

八月八日歌会席上の作四十一首

八月八日の千駄ヶ谷歌会席上の作を分析する前に、日記を検討しておきたいが、八日から十九日までの日記は、「十二日間の記」と題して書かれたものである。理由はその中に述べられている。前半を引用しておこう。

「八日、千駄ヶ谷歌会の日なり。午前明星の歌をなほし、一時頃ゆく。珍らしきは大井蒼梧川上桜翠二君なりき。先づ明星を百号に「て」やめる件、についての相談あり。平出君最も弁じ、大井君保守説を持す。夕刻にいたり、廃刊の事と謝野氏の懇望によって決し、新たに与謝野氏と直接の関係なき雑誌を起すこととなり、平野吉井予の三人編輯に当ることとなり。予は初め固辞せしも聞かれず、与謝野氏の衷心に対する同情は終に予を屈せしめたり。

雅子女史亦会す、吉井北原君もあり。夕刻より兼題の歌の運座。十時頃より、徹夜五十首と動議成立し、翌九日朝にいたりて大方詠出。互選の結果、読上げ終りて十二時を過ぎたり。平野吉井二君と共に残り湯に入る。四時頃帰り来る。

室に入れば女中來りて告げて曰く、昨夜植木女來り、無理にこの室に入りて待つこと二時間余、帰る時何か持去りたるもの如しと。

室内を調ぶるに、この日誌と小説「天鷲絨」の原稿と歌稿一冊と無し。机上に置手紙あり、曰く、ほしくは取りに来れと。

予は烈火の如く怒れり。蓋し彼女、予の机の抽出の中を改めて数通の手紙を見、またこの日誌の中に彼女に関して罵倒せるあるを見、怒りてこれを持ち去れるものなり！

小樽なる桜庭ちか子女史より來信。また母が自ら書きたる手紙を読む心は益々乱れたり。

この故に予はこの十二日間日誌を認むる能はず。またそのために時間を空費したる事少なからず。予は実にいふべからざる不快を感じたり。

如何にして盗まれたるものを取返すべきかにつきて、金田一君と毎日の如く凝議したり。一度、予怒りを忍んで彼女を訪ねしもあらざりき。翌日オドシの葉書をやる。無礼なる返事来る。行かず。十九日の夕に至り、彼女自ら持ち來りて予を呼出し、潸然として泣いて此等の品を渡して帰れり。

たゞ此日記中、七月二十九日の終りより三十一日に至るまでの一頁は、裂かれて無し。蓋しその頁に彼女に対する悪口ありたるなり。

これにて彼女の子に対する関係も最後の頁に至れるもの如し。」

啄木はこのように、貞子に日記、歌稿、原稿を持ち去られてしまっていたのである。その歌稿は、いうまでもなくノート「暇ナ時」だったであろう。

さて作歌活動についてであるが、啄木は八月八日から小さいノートを歌会に携行し、自分の作品ならびに他の歌人の作品を書きつけるようになった。これが石川正雄氏により、「小判ノート」と名づけられたものであり、『石川啄木全集』（筑摩書房）では、「明治四十一年作歌ノート」と書かれたものである。八月八日以後の「暇ナ時」は、このノートをもとに書かれたものと考えられる。

「小判ノート」の歌稿で、八月八日作とみなせる歌は五十七首である。その中で「兼題の歌の運座」の作とみられるのが、次の十首である。

青

(青草の中に眠れる少女子の胸の上這ふ紅き蜥蜴よ)

青の空澄むともなしに青々と暮れゆくかなし鳥影もみず

袋

(夙く起きしあらしの朝の庭の隅見出でぬ大き黒き袋を)

大いなる黒き袋ぞ魚のごと空を泳げり風きそひ吹く

無

限りなく高くさびしくうつろなる空を仰ぎてなげかひもなし

無

百年の深き眠りのさめしごと呟呻してまし思ふことなく

水

なめらかに氷れる路に子を負へる足蹇一人泣きて喚ける

(たへがたき沍寒来れりわれら皆ここえ死なむと一夜眠らず)

(著し)

(我あまり酔ひて海に入られれて)

(その夜我袋せられて海中に投げいれられき酔ひてあばれて)

我あまり酔ひてあばれて海中に投げいれられき袋せられて

第一首「青草の」は、兼題「青」によって作ったものであろうが、「青草の中に眠れる少女」とは、青々と生い茂った夏草の中の亡き少女サダのことで、「胸の上這ふ紅き蜥蜴」とは、噴き出した火のことであろう。

兼題「袋」にもとづいて作った歌も、注目すべき歌である。「あらし」、すなわちメンタルテンペストが去ったあとに、「大き黒き袋」を見出したというのは、大きな黒いものとして脅威を感じさせていた怨霊が、からの袋のように、実体のないものであることがわかった、ということであろう。

これらの注目すべき歌が、「暇ナ時」に転記されていない。以下、「暇ナ時」の歌稿の逐次的分析をすすめていくが、前述したように、八月八日以後は「小判ノート」から選んで書いたものであるので、その歌稿もあげながら分析していく。

うつろなる空を仰ぎて

406 青の空澄むともなしに青々と暮れゆく悲し鳥影も見ず

兼題の「青」を繰り返している。青空が、とりたてて澄んでいるというほどでもないが、青々としたまま暮れてゆくし、鳥もみえな

いので悲しい思いがする、ということであろう。

怨霊恐怖を含む、重い抑うつから解放されつつある心境であろうが、表現されている感情はやはり悲哀である。「鳥影も見ず」には、少女サダの霊魂と思える鳥がみえない、さびしさが秘められているのであろう。

407 大いなる黒き袋そ魚のごと空を泳げり風きそひ吹く

「大いなる黒き袋」は、前述のように、実体のなかった怨霊であろう。鯉のぼりを連想しながら、空に怨霊の幻影を見た体験にもとづいて、「大いなる黒き袋」が空を泳ぐさまを想像したのであろう。

408 限りなく高くさびしくうつろなる空を仰ぎてなげかひもなし

またもや「空」の歌であるが、その空は「うつろなる空」である。何もなし、うつろなる空を仰いでいると、なげくはりあひもないということで、虚脱感がうかがわれる歌である。末尾の「なし」が、兼題の「無」に相当する語であらうが、「限りなく」も「うつろ」も、「無」に通ずる表現である。「な」が四回繰り返されているのも特徴的である。「な」も、「無」と通ずる音である。

409 百年の深き眠りのさめしごと呟呻してまし思ふことなし

これも兼題「無」の歌である。何も思ふことなく、長い深い眠りからさめたように、自分はいくびをしているというのである。抑うつから脱しつつある心境の表現であらう。「し」を四回繰り返しているのも、特徴的である。

410 なめらかに氷れる路に子を負へる足蹇一人泣きて喚ける

「水」という兼題による歌である。足の不自由な人間が、子どもを背負って、こおりついた路に一人で立ち、泣き喚いているというのであり、窮地に陥った時の自分の哀れな姿を詠んだのであろう。

411 我あまり酔ひてあばれて海中に投げ入れられき袋せられて

「小判ノート」では、「(著し)」と題した二首の二番目であり、兼題の「袋」をまた使った歌である。ラ行音が多く、九回も使われている。

「袋せられて」は、詩「山頂」などから推測されたように、父母により黒い布をかぶせられて、墓地に運ばれた体験があつて、それを想起しての表現ではないだろうか。「黒き袋」の歌を作ったので、連想したものと思われる。

412 病む人も朱の珠履塵扱ひ庭に立たしき春の行く日に

「小判ノート」では、「五十首」という見出しにつづく、「青嵐」と草なびき白百合を折りて飛びたる鶯の瞳よ」という歌の、次に書かれた歌である。「青」と「白」という色彩語を使ったので、今度は「朱」を使ったのであろう。「病む人」は、啄木自身のことと解される。

病んでいたため長く使っていなかった、朱色の玉で作った履のちりを払い、庭に立ててみたが、すでに春は終わろうとしている日であった、ということであろう。病的な状態から脱出し、文壇にはなばなく登場しようという思いにかられたが、すでに文壇の潮流は変わり始めていた、ということを秘めて詠んだものと解される。

413 我うゑてある日に細き尾をふりてうゑて我見る犬の面よし

「我」と「うゑて」を繰り返している歌である。

「小判ノート」では、この歌の前に、「(銅鑼太鼓耳を聳する中にゐて我はさけたる笛ふくみける)」がある。この歌は、『明星』廃刊についてのやかましい議論の場において、自分は、ならない笛を口に行っているかのように、意見を言わないでいた、ということであろう。

「我うゑて」は、うえた犬を自分と同一視した歌であるが、啄木は既に、細い尾を振るうえた犬を、散文詩「曠野」に登場させていた。六月二十二日の作である。抜萃して引用する。

「路に迷ったのだ！」

と気のついた時は、此曠野に踏込んでから、もう彼は十哩も歩いてゐた。(略)

此処は恰度此曠野の中央で、曠野の三方から来る三条の路が、此処に落合つてゐる。落合つた所が、稍広く草の生えぬ赤土を露はしてゐて、中央に一つの濼がある。

濼の傍には、綱縋で拵へた様な、骨と皮ばかりに瘦せて了つた赤犬が一疋座つてゐた。

犬は旅人を見ると、なつかしげにしてはたばた細い尾を動かしたが、やをら立上つて踵と二三歩前に歩いた。

涙もない曠野を唯一人歩いて来た旅人も、犬を見ると流石になつかしい。知らぬ国の都を歩いてゐて、不図同郷の人に逢つた様になつかしい。旅人も犬に近い。

犬は幽かに鼻を鳴らして、旅人の顔を仰いだ、耳を萎めて、首を低れた。

そして、鼻端で旅人の埃だらけな足の甲を撫でた。」

上京後、三年ぶりに再会した貞子を、うえた犬にたとえたと思われ部分を含む、散文詩である。

「我うゑて」の歌も、貞子との再会の時の肯定的感情を詠んだも

のと思われる。「小判ノート」でこれにつづく歌は、「(君を見て避けむとひとりつと入りし森に今かつ我は迷へり)」で、やはり貞子からの逃避の意味をかくしていると解される歌である。

414 幻の霞ひく野をよぎる間に我が半生は歩みつきにき

直前の作歌の「森に」「迷へり」を、「幻の霞ひく野をよぎる」に変換したのであろう。迷いながら歩いているうちに、人生の半分が過ぎてしまった、という悔恨の歌である。

415 われ一人なきて走りぬ賑へる巷に犬の吠えて追ふゆゑ

また「犬」を使った歌であるが、今度は犬に吠えられ、逃げまわっている。はるばる都にやってきたが、貞子に追いかけられ、逃げまわるようになった、自分のみじめさと悲しさを詠んだのであろう。

416 われつねに一人歩みぬわが父の葬りの日にも遠き旅にも

前首の「われ一人」を、「われつねに一人」というように、孤独を一層強調している。「歩み」は、二首前の「歩み」をひきついでたのであろう。たとえ父が死んでも、郷里から遠くはなれての漂泊の生活でも、自分はずねに孤独であるということであろう。

「小判ノート」では、この歌につづけて、次のような二首が書かれている。(「紅き血の小さき足音日に燃えぬ夏の大路の白き埃に」と、「今日一日夏の都をゆく人はおほ天地に居処もなし」)である。両歌とも、窮地に陥ってついに死を決心し、街をさまよった七月二十七日のことを詠んだのであろう。

417 わが酔はずでに全たし死になむと泣くをきよつつ海思ふほど

泣くのをききながら海を思えば思うほど、自分の心は完全に酔ってしまつて死にたくなる、というのであろう。「泣くをきよつつ海思ふ」には、菅原芳子への思いが秘められていよう。啄木は芳子宛の書簡で、「日として御身の事を思はぬ日はなく候。／弱い／涙にもろい女ですと、おん身は書かれ候。(略)弱き弱き涙もろき君小生がやるせなき人生の倦怠にゐて、かの初恋の日の如き心地を以て御身の手紙を見御身の心を心に呼ぶをお許し下され度候。」(明41・7・21)と、また「恋しく候、君。／かく申し候はば、御身は或は怒り給ふべきか。否、見もせぬ男の見ぬ恋、御身はただ柳に風と心にかく給はざるべく候。切に切に然あらむことを祈上候。静けく安けき御身の心の海、私の言葉のために聊かにも波風の立たむことは、私の決して願はざる所に候。」(明41・8・10)と書いているのである。

芳子が、自分のことを涙もろい女と書いてよこしたことが明らかであるし、芳子が海辺に住んでいた上に、啄木は「御身の心の海」という表現さえしている。そして後者の書簡では、「恋しき芳子さま御手許へ」と書いた次に、「去る八日夜新詩社徹夜歌会の時作らうちより二つ三つ書きつけ候」として、自分の歌を十一首、晶子らの歌を十首書きつらねている。そして、自分の歌の最初あげたのが、この「わが酔はず」であった。

418 わが船は積みぬ女人のいつはりを紅の緒に貫ける珠数ども

「海」につづけて「船」の歌である。紅の緒でつないだ珠数のように、女のいつわりがつらぬいている作品を沢山つくつたもの、というのであろう。

小櫛の蝶を夢に見しかな

419 かがやける瞳何見るかの空のその一とこゝろ渦巻くを見る

「る」の繰り返し、「見る」の繰り返しのある歌である。

瞳をかがやかせて空を見上げたが、空のあるところに何か渦巻いているのが見える、というのである。気持が大分明るくなってきたが、なお空への恐怖が残っていたのであろう。

420 醒むる期も知らぬ眠りに入りなむと枕ならべしそのかの一夜

前首の「かの」「その」「一」をひきついで、「そのかの一夜」と合成したものと思われる。「醒むる期も知らぬ」ような、深い眠りを求めながら「枕ならべ」たというのは、貞子との同衾のことであらう。

421 来む世には泣くといふことなき国に生れてしがな我ら一人は

来世には、泣くことのない国に生まれたいものだ、というのであるが、「我ら二人」の一方は菅原芳子であらう。彼女は自分のことを、「涙もろい女」と書いてよこしたのである。そしてこの歌も、芳子宛の手紙の末尾にあげられている。

422 一人一人えむとするなると小さき願ひも許りずいつか老いけむ一人うるにすぎざる事をもて大願とするあやまちはよし

「小判ノート」では、「一人一人えむとするなると小さき願ひも遂げずいつか老いけむ」であった。「一人一人うる」とは、この頃の状況ではやはり芳子への思いで、思ひかなわぬまま年とってしまふ悲しみを詠んだのであろう。そういうことを大願とするのは、ふつうはあやまちといわれるが、自分は肯定するといっているのであろう。

「小判ノート」では、この歌の次に、「(黒髪ぞ日にけに落ちぬい

かがせむ死なむばかりに病みしならねど)」が、書かれている。「老いけむ」から、髪の毛の落ちるさまが連想されたのであろう。

423 ふるさとの寺の御廊に踏みにける小櫛の蝶を夢に見しかな

宝徳寺の墓地でつい踏んでしまった、少女サダのものともみなした小さな骨片のことを、夢にみたというのであろう。蝶も、鳥と同じように、昔から死者の靈魂の象徴とされてきた動物である。特に少女の靈魂の象徴としてふさわしいものである。啄木は、母と生別した少女サダをモデルとしたと思われる、詩「お蝶」を明治三十七年に作っている。一連と四連を引用しておこう。

ふりわけ髪がみのあどけなき
里のお蝶いの年は八つ、

すみれたんぼほ摘み入れし

ちさき袂たもとをかかへつつ、

日香ひかほる山の桜路さくらみち

母を呼ばひてさまよひぬ。(一連)

お蝶おてが母は、五つなる

かたみかたみ一人を和風わふうの

熟睡うまいとこの床に置き忘れ、

三とせと過ぎし春の夜に

あへなく夢はさめやらで、

天あめのあなたにかへりにき。(四連)

母との生別と少女サダ自身の死を交換して表現した、と解される詩である。「蝶」はこのように、啄木の過去の作品でも、亡き少女サダの象徴と解される語であった。「櫛」は、詩「落櫛」で骨片の比喩として使われた語である。

前首で「病みし」と表現したことから、たたり恐怖の源となった体験の夢が浮かんできたのであろう。

424 山たづねそのいたどきの石の上に父が黄金の杵見出でにき

これも墓にかかわると解される歌である。土葬の墓に、後で建てられた墓石の上に、草鞋か草履がおかれていた場面を、回想したのであろう。岩手には、棺をかついだ人たちが、はいていた草鞋なり草履を脱ぎ捨てる風習が各地にあるが、そのような風習による墓地の風景を思い出したものと思われる。

425 故さとの谷の銚こたまに今も猶毎が子守の歌かこもらむこもりてあらむ母が校の音

前首の「山」と「父」を交換したのであろう、今度は「谷」と「母」である。「谷」については啄木は、六月二十三日夜からの大量連作の冒頭で、「石一つ落して聞きぬおもしろし藁千切の谷藁と鳴り鳴きわく谷の叫びもと山を把る谷のどどろき」と詠んだ。谷のイメージは、このように音響のイメージと連合していたので、「銚」が浮かんだのであろう。そして「谷の銚」と母を結びつけるために、「子守の歌」を使ったが、「暇ナ時」に転記した直後、生活に追われている母の姿にふさわしい音響として、機織りの音に代えたのではなからうか。

「小判ノート」には、この歌につづいて、「(今日もまた何か我待つ文使に逢ふらむ心地森にさまよふ)」が書かれている。手紙を待ちうけている心境が明らかであり、菅原芳子からの手紙を心待ちしているのであらう。

426 かく許りばか熱き涙は初恋の日にもありきと泣く日またなし(死なまくも病む)

七月二十一日の芳子宛書簡で、啄木は次のように書いている。

「弱い／＼涙にもろい女ですと、おん身は書かれ候。小生は男に候へば、御身よりは強く候ふべし。然り、強き強き、仲々涙を流さぬ男に候。然しながら此強き私の半生には、泣くべき事のみ多く候。誠に多く候。而して小生は、未だ心の底の底を打語りて、心から共に泣きたしと思ふ人に逢ひたる事これなく候。弱き弱き涙もろき君、小生がやるせなき人生の倦怠に於て、かの初恋の日の如き心地を以て御身の手紙を見御身の名を心に呼ぶをお許し下され度候。」

このような書簡を書いている以上、「かく許り熱き涙」とは、「初恋の日」のように芳子を思いつつ流れてきた涙であらう。

歌意は、このように熱い涙を流すことは、初恋の時にあったと思ひ出しながら泣いているが、こういうことは再びはあるまい、ということであらう。

427 昨日かく今日はたや明日もまたかからむ我に倦めるう悲み

前首に関して引用した書簡にあった、「人生の倦怠」の歌である。昨日もこんな状態、今日もこんな状態、もしかしたら明日もこんな状態だろうと思ひ、倦怠がつづいているのが悲しい、ということであらう。前首の「かく」と「日」をひきつぎ、しかも繰り返している歌である。

428 ふと深き怖れおほえぬ昨日まで一人泣きにしわが今日を見て

前首から「昨日」と「今日」をひきついたのであろう。昨日までは泣いていた自分が、今日は泣けなくなったことに気づいたとたん、深いところにあった恐怖が意識にのぼってきた、というのである。恐怖は怨霊恐怖であらう。

429 見よ今日もかの青空の一方のおなじところに黒き鳥とぶ

前首の結句「今日を見て」を交換して、「見よ今日も」としたのである。「かの青空の一方のおなじところ」は、十二首前の「かの空のそのひとところ」を、少し変換したものと思われる。「黒き鳥」は、怨霊の象徴と解される。前首で恐怖を詠んだところから、空の一隅に感じられる怨霊のイメージが浮かんだのであろう。

430 はた／＼と黍の葉鳴れる故郷の軒端ぞ恋し秋風吹けば

前首で「黒き鳥とぶ」と結んだことによる、鳥の羽ばたきの連想と、三首前で「はたや」という語を使ったこともあって、「はた／＼と」が浮かび、故郷浜民の家屋の軒端につるされた黍の葉が、秋風で鳴るさまが想起されたのであろう。

431 笑むといふはた泣くといふ世の常の心に慣れて父となりなき幼児も知ることをもて恋ふるとせんや

「はた」は、前首の「はた／＼」を、意味をかえて引きついでのであろう。「泣く(泣き)」は、この日の作歌で七回目である。しかしこの歌では、「泣く」の反対の「笑む」から始めている。

推敲前の歌は、笑ったり泣いたりという、ふつうの人と同じような心の変化になれて、結婚をし、父となれた自分であるということ、少女サダの霊への恐怖があったにもかかわらず、子までもうけた自分の変わりようを詠んだのであろう。

推敲後の歌は、笑うかと思うとすぐ泣くような幼児であっても、相手を知るだけでは恋うているとはいわないということ、芳子への思いを詠んだのであろう。

432 月明き秋の海辺の白砂に高くいと高らかに一人笑はむ笑ひてかなしかりけり

初稿の「一人笑はむ」は、四首前の「一人泣きしに」の「泣き

し」を、前首の「笑む」と同じ「笑はむ」としたのであろう。「白砂にいと高らかに一人笑はむ」とは、「砂」に象徴される少女サダの霊に対し、自分は解放されたのだ、という思いを表現することであったと思われる。しかし「暇ナ時」に写した時、「笑むといふはた泣くといふ」からの影響で、やはり悲哀感を加え、複雑なアンビレンツの感情表現「高く笑ひてかなしかりけり」になおしたのであろう。

結局この歌は、月光に照らされた秋の浜辺の光景に託して、少女サダの霊にかかわる、解放感と挑戦的な感情、それに悲哀感を表現したもので、ということになる。

433 月の夜はいとおどけたるわが影を踏みて笑ひき憂き旅にゐて

「月の夜」と「笑ひき」は、前首の「月明き」と「笑はむ」を少し交換したのであろう。憂うつな漂泊の生活の中でも、自分はおどけたふるまいをしているが、一方ではそういう自分を嘲け笑っているのだ、という意味に解される。

愁ひ来て岡に上れば

434 たゞ一人海に向ひて高らかに歌ふさびしき人となりなき

「一人」という表現は、この日の作歌で八回目である。そして、「一人」「海」「高らか」は、二首前に使われた語である。

この歌は寂寥感を強く表現した歌といえようが、「海に向ひて」には、九州の海辺にいる芳子への思いが秘められていよう。次に「君」の歌を作っているのである。

435 生涯の半ばは君にのこりたる半ばは髪を白くそめむため

「君」は芳子のことと解される。これからの人生の半分は芳子への恋に、残りの半分は自分のために使いたい、結局はそう思いながら去ることになろう、というのが初稿と思われる。推敲後の「髪を白くそめむ」は、作品を作りながら老いてゆく、ということである。

436 その初め相見し庭の一本の梧を枯れざる木とも呼びにき

恋いそめし頃、一緒に見た庭の一本のきりの木を、枯れない木と呼んで心変わりしないことを誓ったが、今また芳子に対して同じような気持になっている、というのであろう。

437 筑紫なる下り松浜その浜のあかつき潮に懸せよ

筑紫の浜の朝の潮ののって出帆できるよう、船の轆装をせよというのであるが、芳子の上京を願っている気持を詠んだのである。「松」には、「待つ」が秘められていよう。

438 大嵐国内の鐘の悉く鳴りぞ出でたるころよきかな

「鐘」は、前者の「轆」から、出帆の合図である銅羅の音が連想されて、浮かんできた語であろう。この徹夜会の三首目の作が「銅羅太鼓」であった。「国内の鐘」は、六月二十四日の作「君が名を七度よべばありとある国内の鐘の一時に鳴る」で使われた語である。「大嵐」は、この作歌の前日の日記にある「大暴風雨」と同義語であり、女性と接近すれば起こるのであろう怨霊のたたり、すなわち「メ

ンタルテンペスト」でもあると解される。

かくてこの歌は、芳子が銅羅の音で出帆し、上京してくれば、また怨霊のたたりにおそわれようが、それでもやはり、恋する女性が接近してくるのはこのころよいものだ、ということなる。

439 愁ひ来て岡に上れば名も知らぬ鳥啄めり赤き茨の実

蕪村、白秋に影響されたとみられている歌である。蕪村の句、「愁ひつゝ岡にのぼれば花いばら」のほとんどの部分が含まれているし、八月五日に蕪村句集を読んだばかりである。また、白秋の詩「断章」の四連には、「鳥啄めり赤き茨の実」とかなり共通している部分がある。次のごとくである。

見るとなく涙ながれぬ。

かの小鳥

在ればまた来て、

茨のなかの紅き実を啄み去るを。

あはれまた。

啄み去るを。

啄木はこの「断章」について、九月一日の日記で「……此頃毎号心の花に出してある『断章』の短かい絞情詩に至つては、真の詩だ、真の真の詩だ。心にくき許り気持のよい詩だ。今迄詩壇の唯一人は北原だ！」と激賞している。

このような状況からみて、この歌は蕪村と白秋の前記作品を使って合成したもの、とみなしてよいであろう。しかし、啄木がとくにこれらの作品に注目したのはなぜだろうか。

「愁ひつゝ岡にのぼれば」によって、少女サダの土葬の墓にかかわる悲しい思いが、触発されたのであろう。また、「小鳥」から少

女サダの化身としての鳥、「紅き実」によって墓から噴出した火が連想されたと思われる。

そこでこの歌は、表面上の意味は、憂愁の気分で岡の上へのぼったところ、名も知らぬ鳥が赤い茨の実をついばんでいたので、心がやすまる感じがした、というのであるが、背後には、少女サダの土葬の墓に彼女の化身である鳥がやってきたイメージ、それにまた、墓から噴出した火のイメージがあった、と考えられるのである。

440 いと若き萩の芽にふる紫の朝の小雨に髪洗はまし

前の日の日記に、与謝野家の庭について、「庭の萩風に折れたり」と書いているように、萩を見たばかりなので、前首の「茨の実」を、「萩の芽」に変換したのであろう。「紫」は萩の花の色であるし、「小雨」は二首前の「大嵐」の変換と解される。

「いと若き萩の芽」には若き我を、「紫の朝の小雨」には、たいしたことがないたりを隠しているのであろう。表面上は、若い萩の芽にやさしく降る、紫色の朝の小雨であったならば、その雨で髪を洗うだろうに、という歌意であろうが、基底には、たいしたことないあたりであるならば、むしろ自分の役に立ててしまう、という思いをかくしていたと思われる。

441 よきものの数にかぞへき新らしき衣も髪こき人妻の目も

前首の「髪」から、「髪こき人妻」が浮かんだのであろうが、この「髪こき人妻」とは、「新らしき衣」を実際に贈ってくれた、「みだれ髪」の作者、与謝野晶子のことであろう。八月四日の日記に「……与謝野氏より書留、為替五円。外に、明夕あたり御出下され浴衣お着代へ被下度しと晶子申候、と書いてあり。暫く話なく与謝野の好情を懐ふ。」とあり、七日の日記には「晶子さんは夏に疲

せてベッドの上にあり。／校正など手伝ひて四時辞す。晶子さんが手縫ひの白地の単衣を贈らる。」とある。

これまで着ていたものについては、日記の中で、「一帳羅の単衣が、相憎白地なので、尻のところが黒く汚れたが、着換がないので洗濯屋へやる訳にかぬ。」(7・14)、「夕飯を食ふと、すぐ袴を穿いて出懸けた。(単衣の尻の所が黒く汚れてゐるので)」(7・24)、「九十三度の炎天。灰色になった白地の単衣が垢にしめって、昆布でも纏うてゐる様な心地だ。」(7・27)と書いたほどなので、晶子の厚情はさぞ身にしみたことと思われる。

そのような感謝の心をこめて、「よきものの数にかぞへき」と表現したのであろう。

「小判ノート」では、この歌に次の三首がつづいている。

(かくれ住む吾家の庭の白百合の先づほのめきて夏の夜明けぬ)
(あざれたる鯛の目に似る目の色の汚れを恋といふべくば云へ)

すでにして我また長き思出の中の一人を思出にける

「かくれ住む吾家の庭の白百合」とは、七日の日記に「十一時頃千駄ヶ谷に至る。夏草の路、蜥蜴を見て郷を思ふ。／庭の萩風に折れたり。杉垣の下なる向日葵の花、白と鹿の子の百合の花、風情あり。」とあるので、与謝野家の庭の白百合であろう。「吾家」としたのは、夫妻の情にひたって、自分の家のような思いがわいたためと思われる。

「あざれたる」の歌の「目」は、「人妻の目」からひきついでのであろう。くさった鯛の目に似た「目の色の汚れ」には、自嘲がこめられたのであろう。

「すでにして」の歌の、「長き思出の中の一人」は、やはり少女サダと思われる。

442 ふと路にあひて手をとりありしのみ言ひし人と言ひし人と

「盲ひし」は、「目」を変換させたのであろう。「ふと」あって「手をとる」あったただけだというのは、貞子との関係を意味したものとと思われる。

443 春の雨三日ほど降りて萌え出でし名もなき草も紅く蕾みぬ

この歌は、「愁ひ来て」と「いと若き」の両歌を変換させたものと思われる。すなわち「名も知らぬ鳥」を「名もなき草」に、「赤き」を「紅く」に、「芽」を「萌え出でし」と「蕾みぬ」に、「朝の小雨」を「春の雨」に、というようにである。そして「名もなき草も紅く蕾みぬ」に、少女サダ復活の願望を秘めたものと考えられる。

444 ゆくといふ寝むといふよし帰らむといふ更によしやがて死ぬらむ

「寝む」は、二首前の「手をとるありし」の変換と思われる。ゆくもやすむもよいし、帰るのはさらによく、そして「やがて死ぬらむ」というのは、女性関係を含め、どうしようともいいのだ、どうせ死ぬのだからということであろう。

「小判ノート」では、この歌につづけて書かれたのが、「(夏草この夏の草の明方を照らすにまさる事なしの暁露に諸脛をぬらすにまさるよき事もなし)」であるが、今まさるに感じている夏の明け方のころよさを詠んだのである。

445 幾山河遠き津軽の早潮の瀬戸をへだてて我らかつ恋ふ

津軽海峡をへだてて恋う対象は、函館にいる妻節子であろう。二首前で「帰らむ」と表現した時に、妻のイメージが浮かんできたと思われる。

446 やごとなき髪のゆらぎに落ちにたる櫛踏折りし物（れる）ごりもしき

またもや「髪」を使っているが、「やごとなき髪のゆらぎ」、すなわちよんどころなく髪がゆらいだというのは、「手をとるありし」や「寝む」と基本的に同じであろう。「櫛踏折りし」は、その髪の主である貞子を捨てたこと、「物ごりもしき」は、こりてしまったこともあるということであろう。しかし「落ちにたる櫛踏折りし」には、貞子との性関係のさなかに娘重病の手紙が届けられ、サダの怨霊のたたりという観念を契機に、彼女の墓から掘り出した骨片を踏んでしまった体験が想起されたことも、秘められたと解される。

「小判ノート」には、この歌につづいて、「(人すまぬ館の庭の蓬生の中に見出でし紅き小手鞠)」という歌が書かれているのであるが、「人すまぬ館の庭」とは墓地のこと、「紅き小手鞠」とは、（てまり）手鞠で遊ぶような年頃になくなった、少女サダの墓から噴出した火のことと思われるのである。

八月八日作四十一首の総合的考察

以上、八月八日千駄ヶ谷歌会での作四十一首を、逐次的に分析してきたが、その結果を総合的に考察しておこう。

- (1) やはり「鳥」「魚」「犬」「蝶」など、動物が比喩に使われている。
- (2) 「黍」「梧き」「萩ほし」「萩」など植物の名も、「黍」を除いては比喩と思われる。

- (3) 「空」が五回、「海」が四回使われている。「潮」「船」「浜」などもあり、海への関心が強いようであるが、筑紫の海辺にいる芳子にაცოგაれてゐるためであろう。

- (4) 色彩語は「黒」「青」「白」「紅」が各二回、「黄金」「朱」「赤」が各一回であり、これまでの傾向に比して、赤系統の色彩語の割合がふえている。

(5) 数詞では、「一」が十一回も使われているが、そのうち六回は「一人」という語である。強い孤独感の反映と思われる。
 (6) 感情表現としては、「泣く(泣き)」「涙」「悲し」「憂き」「愁ひ」など、抑うつ系の語が多い。しかし、「こここよき」「よきものの数にかぞへき」などの、肯定的感情の表現もある。

(7) 内容は、貞子に関わること、怨霊への恐怖、それに関連している幼い頃の回想、父母と妻のイメージ、筑紫の歌人菅原芳子への思いが、主要なものであったと解される。

- 1 大沢 博 啄木の作歌過程の心理学的分析——「東海」歌への分析——総合的アプローチ——岩手大学教育学部研究年報第三五巻 昭五〇
- 2 大沢 博 啄木の作歌動機の心理学的分析 『暇ナ時』などの恐怖の歌を中心に——岩手大学教育学部研究年報第三六巻 昭五一
- 3 大沢 博 啄木の「我」の構造——『暇ナ時』の歌稿にもとづいて——岩手大学教育学部研究年報第三七巻 昭五二
- 4 石田六郎 啄木短歌の精神分析——肉筆歌稿「暇ナ時」の分析——石田神経科 昭四六 八六—八八頁
- 5 前掲書 八八頁
- 6 金田一京助 石川啄木 角川書店 昭三〇

(一九八四年一月三十一日受理)